心のスケッチブック

史子

目次

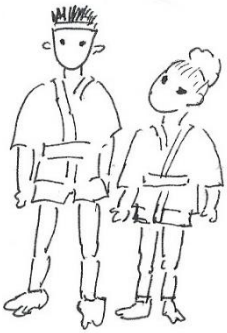
序……3
弁当……6
丸子さん……10
年を重ねて……15
静かな人……19
ハーモニカを吹く人……24
悲しい……29
雑誌売り……32
ステキな風が吹いていたのに……36
お子さんは居るのですか？……43

現実……49
おはようございます……52
おわりに……58

序

新宿通り沿いのその町の夏祭りは、六月の初めに毎年行われていました。ビルの谷間の小さな児童公園に神酒所が設けられ、日頃はあまり賑わうことのない公園もこの時ばかりは華やぐのです。

町内のお年寄り達や、商店主、その奥さん達が一様に力を惜しまず協力し合うのです。子どもの山車が出るころになるとまるでどこからか湧き出てきたように若い父母、おじいちゃん、おばあちゃんと共に子ども達が集まり、公園には一年に



一回だけ大勢の子供たちの元気な声が響き渡ります。女性軍は山車を引いた子ども達のために、果物や飲み物を用意したり、お弁当を渡したりと大活躍するのです。お年よりも神社総代として山車と共に歩きます。そして御神輿巡行のころになると、祭りは最高潮に盛り上がりました。青年部の人達は祭礼の世話役として準備を整え、みこしの担ぎ手として完全燃焼するかの如きでした。女性軍も尚更に人々の世話をし、また担ぎ手として頑張る人もいました。祭礼は同じ神社を氏神とする他の町会でも同時に行われましたから、二年に一度は新宿通りを各町会の十数基の神輿が勢揃いをして、練り歩きました。それはほんとうに担ぎ手も見る方も楽しい時間でした。心

が躍るようでした。
活気に満ちた三日間が過ぎると、また何時もの静けさが公園に戻ってくるのでした。
新宿から半蔵門へと通じる道沿いのこの公園には、一寸ひと呼吸入れながら話し込んでいる人達や、一人ぼんやりと時を過ごしている人の姿などが見られますが、ブランコなどで遊ぶ子供の姿は滅多に見ることなどありません。
公園に一寸立ち寄り、また公園前を通り過ぎていく人の中には、何気なく視界に入ってきただけなのに、なぜか心にその姿を留めていく人達がいました。

弁当

公園にその男が現れたのは、丁度石油ショックの頃のまだ暑さの残る九月の中旬のことでした。紺色の背広姿にビジネスバッグを持ち、昼頃になると必ず現れ、弁当を開げていました。公園に隣接する我家の台所からは、公園のようすがよく見え、夫と同じ年頃のその男の人が妙に気になったのです。きっとセールスマンか何かで、営業中に一寸昼食をとっているのだなあーと何とはなしにながめていたその弁当は、いつもきれいな柄の布に包まれていて、弁当箱の中のお米の白さ

が目に焼きついています。一週間、二週間と毎日同じ場所で昼食というのも少々不思議だなーと思い始めたころ、たまたま公園を去る男の後姿を目にし、少し足に障害があり、右肩の下がった独特の歩き方をする人であることに気が付きました。ニュースで失職する人の増加が伝えられていた頃です。もしかしたら毎日職探しをしているのかも…その後姿を見送りながら思い、ふっと毎朝弁当を作り、男を送り出しているであろう人のことが頭を過ぎりました。それから数日して男の姿は公園から消え、仕事が見つかったのかもと人ごとながらほっとしたものです。

その年も押し迫り、暮の買い物に新宿に出かけ歌舞伎町の

近くの雑踏を歩いていた時のことです。人混みの中に、何だか不自然な空間がぽっかりとあることに気がつきました。その空間の中に一人の人影がありこちらへと歩を進めていました。だんだん近付いて来る髪もひげも伸び放大で、とぼとぼと歩く男の姿は、どこか見覚えのある感じなのです。空間が間近に迫り、ぽつんと居る男の様子を見た時にドキッとしたのです。男が着ていたのは汚れて、ズボンの裾がすり切れてはいるものの、紛れもない紺色の背広です。すれ違った後姿を、私は思わず立ち止まり振り返って見てしまいました。そうあの右肩の下がった独特の歩き方…目の前に弁当箱を包んでいた花柄の布、そしてあの弁当箱の中のご飯の白さが浮かんできまし

た。「何ということ」…雑踏の中の迷惑も顧りみず、私は立ちすくみました。弁当を作っていた人は今どうしているのだろうと思いました。雑踏の中に消えていったその後姿は私の目の奥にしっかりとその姿を残していきました。

それは我家も冬のボーナスの無い寂しい年の瀬のことでした。

丸子さん

腰が直角以上に曲がっているにも拘らず、まめまめしく動いているのが丸子さんでした。公園の水道で洗濯をしフェンスに干したり、何やら野菜や魚などを洗って、料理の下ごしらえをしている姿を目にしたのが最初です。夏でもたくさん着込んでいる姿はまん丸で私は心の中で「丸子さん」と呼んでいました。が何時の頃からか公園の水道は使い勝手の悪いものに変わり、水を流したままは使用できなくなりました。丸子さんの公園での洗濯姿は見られなくなり、かわりに

近くの駅の構内入口の植込みにちょこんと腰かけて、丸くなって寝ている姿を見かけるようになりました。

丸子さんは新宿通りのどの辺りから始めるのか判りませんが、歩道に捨てられたタバコの吸殻や小さな紙くずなどを拾いながら、この通りを往来しているのです。丸子さんといえば、玄関ぼうきとちり取り、そしてゴミの入った袋というのがトレードマークでした。毎日せっせと掃除している姿を目にしました。そのためでしょう。歩道や信号待ちの交差点や駅周辺の通りは実にきれいで、何か心づけをしたくなるような働きぶりなのでした。朝早く掃除をしているのを見かけ、私は少々の包みを「いつもきれいにしていただいて」と手渡したことが

あります。少ししゃがれた声で丸子さんは「どうも相すみませんね」と笑っていっていましたが、それはこちらの台詞なのにと思ったものです。後日、駅前の交差点を渡る時に初老の紳士がそっと手に包みを握らせている姿を見て、丸子さんの働きぶりをちゃんと見ている人が居ると嬉しくもありました。それほど丸子さんのお陰で通りがきれいだったということです。最初に見かけたときにはまだ六十歳前位だったのでしょうか。でも年を重ねるに順い、小さな体は増々小さくなり時折姿を見かけない日が多くなってきました。病気でもしているのかしらと思っていると、思い出したように駅の構内入口の何時もの場所でまん丸になって寝入っていたりしました。体力も

落ちてきたのでしょう。丸子さんはぼんやりと座っていることが多くなり、掃除をすることもほとんど無くなりました。とたんに駅の出入口や、町の歩道、交差点の信号待ちの路肩はタバコの吸殻だらけになってしまい、丸子さんの有難さをしみじみと感じたものです。ほんとうに何時も何時もきれいにしてくれていたのです。

ほどなくして丸子さんの姿を見かけることはパタッと無くなりました。何年この界隈を掃除しながら往来していたのでしょう。ずい分長いことです。丸子さんの過去を知る縁(よすが)もありませんが、立った一度だけ公園のベンチに腰かけて、実に理路整然とした独り言のような演説をしていたのを聞い

たことがあります。その言葉の中に、丸子さんの捨ててきた過去があるのかも知れません。

年を重ねて…

ブルーの作業服の男性が公園に現れるようになったのも石油ショックの頃でした。真新しい作業服を着て、手には小さなボストンバッグを下げている姿は、地方から職探しに上京してきたのかなと思わせる雰囲気でした。実直そうな表情をしたその男性は、毎朝公園に現れ、顔を洗いヒゲを剃り、ピカピカの清潔感漂う顔をしてベンチで一息つくとまたどこかへ去って行きました。こんな日課を繰り返すうちに、たまたま公園の砂場の縁（へり）に座り話し込んでいた二人のおじさん達

の仲間に入り、一日中一緒に話し込むようになりました。それから数日もしないうちに、二人のおじさんと共に作業服の男の姿も見なくなりました。

それから一ヶ月程過ぎて再び公園に現れた男は、相変わらず小ざっぱりとしてはいるものの、小さなショッピングカートに小さなダンボールをくくりつけ、いくつもの包みを入れて引く姿に変わっていました。早朝、公園で下着やくつ下を洗濯しフェンスいっぱいに干して昼すぎになるとそれを取り込み立ち去るという日課がだい分続きました。バブル期に入ってからは、その男の姿も見かけることもなくなりました。きっと住み心地のよい場所を見つけたのでしょう。

ところがバブルがはじけ始めた頃、また公園にその男の姿がありました。公園のトイレを利用するために立ち寄ったのでしょうか。ショッピングカートは古い乳母車にかわり、ダンボール箱や、衣類の包みのようなものや、ふとんを丸めたものなど所帯道具が増えていました。あの清潔好きそうな表情は消え、ひげもごま塩となり伸びて一見八十歳近い老人のようにも見えました。この時から時折新宿通りを往来する姿をよく見かけるようになりました。年を重ねるに順って、乳母車はリヤカーにかわり、大変な荷物となりました。腰が少し曲がり、疲れた顔を

した男にとって、あの荷物を毎日引いて移動することは大変な苦労だったに違いありません。

実直な性格がそうさせたのでしょうか。同じ仲間の人達の世界にはなじめず、彷徨い歩いているように私には見えました。リヤカーの荷物が実にきちんと整理されていることがそれを物語っているような気がします。

いまも新宿通りのどこかを彷徨っているのでしょうか。ずい分年を重ねました。

静かな人

或る朝、その青年はおだやかな笑顔をたたえて、公園の木の横に佇んでいました。ふっくらとした赤いほっぺたが、少年の気配をまだ残しています。どこかで支給されたらしい紺色の真新しい作業服を着て、スポーツバッグを持っていました。背丈は百八十センチほどの少し太った大柄な若者です。背筋をピンと伸ばして立っていたその初々しさが印象的で、私のスケッチブックの一人になったのでした。

それから数ヶ月後の寒い冬の日、通りで大

柄な体格のいい流浪の人と行き違いました。よく見るとあのふっくらとしたほほ、おだやかな眼差し、紛れもなくあの青年ではありませんか。短めの皮のコートをたくさんの衣服の上に着て、縄をベルトのようにしめ長靴姿で、頭には紙袋の帽子をかぶっていました。胸を張って堂々と歩いていく後姿から、私は視線をそらすことが出来ませんでした。それからというもの、青年はビルの立ち並ぶ新宿通りの日なたを求めて、終日立たずむようになりました。陽当りのよい場所を見つけては少しずつ移動し、人々の邪魔になるでもなく、じっとお日様の中に居るのです。春や夏は別のところに居るのでしょうか。晩秋の冷たい風が吹くころから春先までの日中、それが日課と

なり何年続いたことでしょうか。通り沿いに住む人達も、別段嫌悪するわけでもなく、風景の一部のように馴染んでいるかのようでした。

年月を経るに順がって、着ているものは黒光りし、油の塊のようになり、何時の頃からかあの大きな体はだんだんと萎んでいきました。おだやかだった眼差しにも少し険しさが加わり、独り言をいいながら通り過ぎるようになり、日なたを求めて佇むことも少なくなりました。そしてパタッとその姿を見かけなくなりました。あの静かな人はどうしたのかしらねと私達は話したものです。

最初にあの赤いほっぺたを見た時に、私はその青年の故郷や両親のことに思いを馳せました。あんなに立派な若者なのに仕事を失ったのかなあなどとも想像しました。

通りに現れなくなった初夏の頃、犬の散歩に出かけた近くの土手で青年を見かけたことがあります。明るい日光の下で松の木の切り株に腰かけて、上半身はだかの体をタオルで拭いている後姿を見て、はっと息を呑みました。その背中には三十センチ近くあるような古い大きな傷跡がありました。静かに佇んでいた姿を思い浮かべながら、きっとどんなにか辛かったであろう時を刻んできた青年の横を、私は通り過ぎたのです。きっと働きたくても働けなかったのかも知れません。そし

てその時もその青年のお母さんのことを考えたのです。何処かで心を痛めながら息子の帰りを待ちわびて、実際よりも長い長い年月を過ごしてきたことでしょう。
母親にとって当てもなく待つことほど、切ないことはないと思うのです。

ハーモニカを吹く人

小さなビルの谷間の公園には三本の銀杏の木がありました。雨風の少ない暖かい冬にはいつまでもその葉がいつまでも枝の先にとどまり、日の光に照らされて黄金色がまぶしく感じられたものです。ところが一陣の風によって公園は一面の葉のじゅうたんに覆われてしまいます。そんな銀杏の葉に覆われた蒲団には、つい先程まで人が寝起きしていたのに、起きたばかりのようなふくらみを残したまま忽然と姿を消した人が居ました。

男に気付いたのは、暖かい十一月とはいえ、やはりビルの谷間の公園の朝晩は冷え込みが厳しく、そんな早朝のことでした。地面に同化するように薄い蒲団にくるまって寝ている姿を、大丈夫なのかしらと一寸気になりながら横目でチラッと見たのが最初です。ゴミを集積所に出して戻ってくると、やはり通りすがりに見かけて心配したらしい仲間らしき人が、寝ている男に声を掛け起こしていました。男が起き上がると、仲間らしき人はほっとしたようにその場を立ち去りましたが、ほどなくして湯気の立ったカップラーメンを手に戻って来て男に手渡すと、男はそれをすすりながらほんの短い間だけ言葉を交わしていました。私は何となくその様子を通りすがり

に見ていたのですが、仲間の人が去ると、男はじっと身じろぎもせず座っていました。まだ暗さが残る朝でした。しばらくして台所仕事をする私の耳に、「ちょうちょ」や「里の秋」など静かなハーモニカの音色が届いてきました。男が吹いているのです。

ハーモニカを吹くその人はとてもおしゃれで、いつも散髪したてのようなさっぱりとした髪形をし、身ぎれいにしていました。荷物はきちんと整理され、その上にかけてあるジャンパーはモダンな色合いのシャレた柄物でした。蒲団の脇には皮製のスニーカーがいつもきちんと揃えてありました。そういえば夏にも一度この公園に現れて、ハーモニカを吹い

ていたことがありましたが、寝泊りすることもなく、あまり気にも留めませんでした。ただその時もおしゃれなおじさんだった印象は残っているのですが、流浪の人とは考えもしませんでした。

男は一日中蒲団の上に座り過ごしたり、ベンチに腰かけて人通りをながめていたりしました。朝と夕方に男はハーモニカを吹きました。「ふるさと」や「植生の宿」や「庭の干草」

など音楽の授業でよく歌ったなつかしい曲ばかりです。「音楽の先生だったのかなあーまさか」などいろいろ思いを巡らしながら台所仕事をするのが、私の日課のようにもなりまし

た。

十二月になるとさすがに銀杏の葉も散り始め、一陣の風に公園中が黄金色に変わっても男は落葉の下の蒲団にもぐるように寝ていたのに、突然荷物も何もかもその場に置いたまま男は消えてしまったのです。主の無い荷物はずい分長い間公園の隅に置かれたままでした。

翌年の桜の頃、やかんを手にした男を千鳥ヶ淵の公園近くで見かけたと家人が話していました。満開の桜を見ながら、日長一日「さくらさくら」や「荒城の月」などをハーモニカでまた吹いていたのでしょうか。

悲しい

以前は余り見かけることのなかった若い流浪の人を見るようになったのはオーム事件の頃からだったような気がします。

素足に硬くなってかかとの潰れた皮靴をはき、ゴミ箱をのぞいている青年のあまりの若さに私はドキッとしました。汚れるだけ汚れた髪はボサボサで、衣服も破れている姿に、私は心の中で帰るところは無いの？ふるさとはどこなの？待っている家族のところへは戻れないの？と問いかけ、息子と同年齢位の若者の放心したような横顔を見て目頭が熱くなりま

した。戦争も何もない物の溢れた平和な国なのにどうしてしまったのかしら…この若者はどこから来て、どこへ行こうとしているのかしらと悲しくなったのです。

事情があってさまよう人はさまよい歩いているのでしょう。でもその人達の向こうには、彼等を失って悲しんでいる家庭や、今か今かと帰りを待っている人が居るに違いないと思うのです。全てを捨て去ること、帰るに帰れないことも辛いことでしょう。それにも増して何の前ぶれや説明もなく去られたり、何時帰るか判らない人を待つことはどんなにか辛いことだろうと思うのです。

このような形で公園に現れ去っていく人達を見ていると悲

しい…ほんとに悲しいと思うのです。

雑誌売り

年のころは五十五歳前後、もっと若いのかも知れません。きちっと髪をなでつけ、黒い背広に白いYシャツ、ダークグレーのネクタイ姿のその男は鋭い目付きをし、ビジネスバッグを手にいつも同じビルの角に立っていました。当時はまだ黒い背広姿はあまり一般的ではなかったような気がします。何だか怪しい雰囲気…買い物に出る度にそんなことを考えました。迎賓館が近くにあるという土地柄、各国の要人が来日する時など通りの警備も厳しく私服の刑事がよく立っ

ていたりするのですが、一寸風体が違います。がしばらくしてその理由が判りました。男は路上で雑誌を売るために、人通りを観察し場所を物色していたのでした。

ほどなくして同じ背広を着た男は、一冊百円で未成年非見の雑誌を並べて売り始めたのです。チラホラとサラリーマンや予備校生達が買い求めているようでした。日を重ね男は若い男に店番をさせてふらふらと気ままにしているようでした。が背広は日に日にヨレヨレになりひげも伸び放大で、お決まりの荷物の増加が始まりました。たまに店番の若者の様子を見に来るようでしたが、駅前のビルの日溜りで日なたぼ

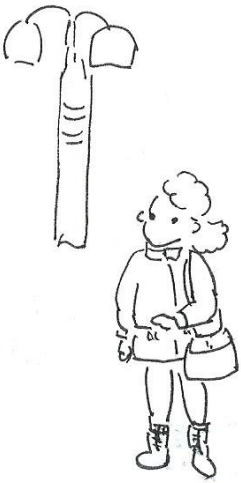
っこをしながら、数人の仲間と話し込んでいたり、寝ころんでいました。そのうち店番の若者はいなくなりました。だんだん男の表情から鋭い光が消え失せ、ぼんやりと雑誌の前に座り込んでいることが多くなり、寒風の中で男の体はますます細くなりとうとうその姿を見なくなりました。

でも路上の雑誌店は、二人の男女によって受け継がれたようでした。中年の女の人はいかにもパワフルな感じで、見事に茶色光りする顔に少しばかりの化粧をし、口紅の赤が妙に目立っていました。連れの男は少し年下でしょうか。通りすがりに立ち寄るおじさん達と楽し気に話している様子をよく目にしました。たくまし気な二人が引き継いだ雑誌売りは、時折場

所を変えながらも、私がその町を去る時もまだ店開きをしていました。

ステキな風が吹いていたのに…

その人をはじめて見かけたのは、日差しの柔らかい冷たい風も心地よい初冬の頃でした。パーマのかかった長い髪を一本に束ねて、グリーンのコートにタイトなズボン、そして編み上げの靴をはいていました。皮のショルダーバッグを下げた姿はとても颯爽としていて、丸い大きな瞳は、モダンな雰囲気を漂わせすれ違った時には、ステキな風が通り過ぎていくような気がしたものです。丁度当時の私と同じ年頃のように見受けられ、そ



の足取りのスマートさ、私のスケッチの中でも一際印象深く残っている人です。
昼食準備の買い物に出ると必ずその人と行き会いました。何時も新宿方面から四谷に向かい軽やかな足取りで歩いていて、あら今日も…と何の仕事をしている人だろうと想像を膨らませたりもしました。ただ何時も同じ服装だなあーと一寸気にはなっていました。
ところがその人の荷物も一つ二つと増え出したのです。ショルダーバッグ一つだったのに、何かがいっぱいつまったスーパーの袋を三つ四つと持って往来するようになったのです。
「まさか…」私は心の中で絶句しました。

翌年の春まだ寒い頃の早朝、前日買い忘れた牛乳を近くのコンビニに買いに行った時のことです。レジで支払いをする私の背後で、「すみません、お湯を少しいただけないでしょうか」とやさしく品のよい言葉にふと振り返るとあのモダンな瞳がそこにあるではありませんか。着ている物も靴も変わりないその人の長い髪は短くカットされていました。何より変わったのは、一段と増えたスーパーの袋が店の外に置かれていることでした。コンビニの店員は一寸いやな表情はしたものの、駄目だとは云いませんでした。その人は紙コップにお湯を注ぎ、外の植え込みの縁に

腰かけて、両手で暖をとるようにコップを持ちおいしそうにすすっていました。ただただビックリ仰天の朝でした。

それからずいぶんの間その人を見かけることもなく、三年ほど過ぎた冬のことです。コンビニの植え込みの縁に腰かけて紙コップを手にしている流浪の女(ひと)がいました。着る物を着られるだけ着こんだ上に、エンジ色の毛布様のものをかぶって口を動かしていた人と思わず目が合ってしまいました。私は心の中で「アッ」と叫んでしまったのです。見覚えのある紛れもないあの丸い目…以前はモダンででもつつましさのある眼差しだったのに、いまは実にふてぶてしい光を放ち、人の顔を見てニヤッと笑ったのです。大分太って、赤くテカテカし

ているその人の頬を見ながらどんな事情があったにせよ、私には信じられないと最初にその人に会った時のあのステキな風を思い出していました。

何とも不思議な光景に思えたのです。

桜の頃になっても時折コンビニの植込の縁に腰かけている姿を見かけました。大荷物には変わりないのですが、顔はきれいに洗われていて白さが戻っていました。最初に見かけた時のグリーンのコートを着て、編み上げのクツをはいています。手には大抵競馬か競輪か…なにかその類の新聞があり、熱心に目をこらして見ていました。その様子は妙に生々しくその人の何かを体全体が語りかけているようにも見えました。そ

れからしばらくしてコンビニの植込の縁に腰かけている姿も見なくなり、その後その人と出会うことは二度とありませんでした。

通りを往来する流浪の人々は、その時々の様相を如実に示していました。バブル期以前は共通した雰囲気があり、一見して判るような気がしましたが、バブル期になると、ごく一般の人々と変わらない小ざっぱりとした身なりをし、髪の毛はいつも整えられ、ヒゲもきちんとそっている人が多くなりました。息子達の憧れだった有名メーカーの皮製のスニーカーなど我家では高嶺の花でしたが、それらを履いているおじさん達をよく見かけました。まず足元から高級化していったよう

な気がします。荷物のふとんや毛布も新品かと思えるほどのものでした。ですからたまに、髪の毛はだんご状にかたまり、顔も手も黒光りしているおじさんに出会うと、なんだか筋金入りだなあなんて、妙な感心をしたものです。表情もそれ程とげとげしく無く、仲間同士と談笑する姿をよく見かけたものです。

バブルが弾けるとその様相は少しずつ変化していきました。そして何故か女性や若者の流浪の人が増えたような気がします。

お子さんは居るのですか？

近所の商店やスーパーなどで買物する人々は、どこの誰かは知らなくても、大抵顔馴じみでした。しばらく姿を見かけないと病気をしているのかしらとか、引越したのかしらなどと気になるものでした。久しぶりに見かけたりすると元気な様子に人事ながら安心したものです。

この界隈では割烹着姿で買物をしている人はあまり見かけませんでした。九月の頃年齢四十歳前後の白い割烹着姿に買物カゴを持ったその女性が通りに現れた時、

今時若いのに珍しいなあと一寸目立っていました。近所に引越してきた人なのだろうと思っていたのですが、夕暮時に何時も同じ姿のその女と行き会ううちに、ひとつ二つとスーパーの袋の数が増えていくことに気が付きました。「まさか…」と思いましたが、持ち切れない程の袋の数になっていった或る日からその女を見かけることも無くなりました。

十二月に入った寒い日、長いダウンコートを着て、その女(ひと)は公園の砂場のまん中に立ったまま、カップラーメンを食べていました。表情も以前と変わりなく、カップラーメンを食べ終わると新宿駅西口行のバスに乗って立ち去りました。その後もカップメンを食べる姿やバスに乗り込むところを見か

けました。きっと少々のお金は持っていたのでしょう。ビルとビルの谷間の公園は北風が吹き抜けました。その女にとってはあまり居心地がよくなかったのでしょう。その後しばらく姿を見なくなり、翌年の春頃バス停のベンチに腰かけているのを見かけたのが最後となりました。まわりの何ものをも受け付けないような無表情な顔をして、独り言をつぶやきながら足の爪を切っていました。ジワジワと心を病んでいく姿を見ているのは悲しいことです。通りすがりに時たま行き会う私には、何もしてあげられません。

この女(ひと)にだってきっと家庭があったに違いありません。私は心の中で「お子さんは居るのですか？」とたずねてみました。もしかしたら私の想像とは異なり一人で暮らしていたのでしょうか。でも急に居なくなってしまったこの女の消息を心配している人はきっといるでしょう。

誰もが好き好んで流浪の生活を選んだりしたのではないと思うのです。公園の掃除をしていた早朝、年の頃七十歳位の白髪の人が公園に立ち寄り、顔を洗いヒゲをそってから話しかけてきました。「この公園この頃散らかってるね」と…。時折トイレを利用するために寄ることから始まり、いろいろ自分

のことを話し出しました。ずい分年老いて見えたのに、まだ五十七歳だというのでびっくりしました。丁度ＮＨＫの大河ドラマで「足利尊氏」をやっているころです。彼は足利家の歴史や、東京やその近郊の史跡のことなど実によく知っていました。きっとあちこち歩いているのでしょう。「私は栃木の出身だから」とポツリと言いました。電車を乗り継いで時々最寄駅までは行くのだそうです。家族・親・兄弟皆健在なのだといっていました。「でも今更帰れないよね」と寂しい笑い顔で男は話してくれました。小一時間は話し込んだでしょうか。竹ぼうきを持ったまま話している私のことを台所の窓から家人は心配して見ていたようです。家に戻ると「いい加減にしたら」と

家人に叱られたことは云うまでもありません。でも、この人はきっと人恋しく…というよりも家族のことが恋しくて自分の身上ばなしなどしたかったのでしょう。流浪の人は誰もが故郷はなつかしくでも近寄り難いのかも知れません。

現実

バブルが弾けたころから、毎日規則正しく新宿方面から四谷に向かって歩いていく小柄な女性を見かけるようになりました。四十歳位なのでしょうか。いつも足早に通り過ぎて行きました。髪にはブラシの目が通り、からし色のコートに茶色か黒のスカート、そしていつだってストッキングを身につけローヒールのパンプス姿です。もしきっちり丸めてしばった毛布と二・三個の紙袋を持っていなければ、ハンドバッグを下げた事務の仕事が似合いそうな女性の出勤風景

という感じでした。「何故」いかにも真面目その様子からおよそ流浪の人には合わない彼女に、いまの生活への道のりを聞きたい程でした。

ほんとうに注意して見なければごく普通のオフィスレディです。たまたま市ヶ谷駅の地下鉄を利用した時のことです。人通りの少ない構内の片隅で、小さな体をより小さく丸めて、毛布にくるまって寝ている姿を目にしました。まさしくこれが現実なのでした。今でもこの女(ひと)のことを思い出すと「何故？」という問いが甦ってきます。その後も忙し気に往来する姿を何度も目にしました。公園で休んだり、食物を口にしていたりという姿は一度として見たことはありません。この通り

をひたすら歩き過ぎていくだけでした。

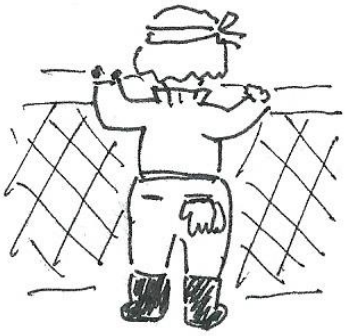
おはようございます

駅でいつも靴みがきをしていた小さなおじさんもバブル期にはビルから靴を持って出てきたり、ピカピカに磨き上げた靴をビルの中に届けたりしていたものです。バブル崩壊後はクツみがきの仕事も無くなったのでしょう。ぼんやりとビルの際にしゃがんで、人の往来をながめていることが多くなりました。朝のゴミ出しに通りに出た或る朝、たまたま近くに座っていたおじさんは「おはようございます」と大きな声で挨拶してくれました。私も「おはようございます」と返しました。それからというものこの小さなクツみがきのおじさんに出会

うと、朝昼夕かまわずに、必ず大きな声で「おはようございます」と声をかけるのです。横断歩道を渡っている時など、びっくりして人が私の顔とおじさんの顔を見るのです。勿論私も最初のうちはいつだって「おはようございます」と返していたのです。でもだんだん気恥ずかしくなってきて、遠くにおじさんの姿が見えると道の反対側に渡ったり、路地を曲がったりするようになりました。そのうちにおじさんも一まわりも二まわりも小さくなって姿を見せなくなりました。当時を思い出すと自分のしたことがとても恥ずかしいことだ、おじさんに悪かったなあーと今更ながら思っています。

三十五年間住み馴れた新宿通り沿いのその町を離れる冬に

も、ビルの谷間の小さな公園には一人のおじさんが寝泊りしていました。夜だけダンボールの箱をつなげて寝床を作りその中にもぐり込むようにして寝ていました。履き古したゴム長グツが箱の外にきちんと揃えてありました。朝人々が目覚める頃には、ダンボールの箱は畳まれて公園の隅に片付けてありました。そして公園はいつもきれいに掃除されていました。年齢は五十歳位だったのでしょうか。いつも軍手をズボンの後ポケットにはさみ込んで、タオルの鉢巻をして、工事の作業者や荷下ろしのトラックなどが停まっているとじっとながめていました。熱心に見るとその様子



にこの人は工事現場などで働いていたのかなあーと想像したりしました。
おじさんは歩道上のゴミ置場をいつも整理してくれました。カラスよけのネットをきちんとかけ直し、清掃車がゴミを持ち去ると残された小さなゴミクズなどを拾い、まわりの掃除をし、カラスよけのネットをくるくると丸めて、次に使い易いように片付けました。或る早朝ゴミの袋を出しに行くと、無造作に置かれたゴミをおじさんはせっせと整理していました。
「いつもきれいにして下さって有難うございます。」と声を掛けると、「夜中にゴソゴソ散らかす者がいるからなあ」とおじさんはポツリといいました。

「まったく困ったものだ」とこのおじさんの存在に眉をひそめる人もいました。子供達の遊び場である公園には確かにふさわしくないことです。がビル風や北風の吹き抜ける晩秋から春先までは、子供の姿をこの公園で見ることはありません。寒い間はほんとうに人が利用しない公園なのです。そのことを流浪の人々は知っていたのではないでしょうか。この時期になると毎年おじさんのような人が現れるのでした。おじさんだって寝泊りをする場所に公園を使っていることをきっと気にして、自分にできることを精一杯していたと私には思えるのです。

引越しの三日程前からおじさんの姿を見かけなくなりまし

た。引越し当日の朝、もしおじさんに会えたらいつもゴミ置場の整理をしてくれていたことへのお礼の気持ちを、コンビニのホカホカ中華マンに託して手渡したいと思っていましたが、とうとうそれもできずに私はその地を去りました。長年世話になった町の人々への感謝の気持ちと共に、おじさんにもありがとうと思いつつ…。

おわりに

ここに登場した流浪の人々は、私がとりたてて追い求めたわけではありません。毎日の主婦としての生活の中で、台所の窓から見えたり、買物に出かけたりした時に自然に視界に入ってきたことを、知らず知らずのうちに心のスケッチブックに描きためてきたもの…というより何時の間にかその姿が残されていたということです。思い立ってその頁を捲ってみると、何と多くの人々やできごとがしるされていることでしょう。

新宿通り沿いのビルの谷間のほんとうに小さな公園でしたが、

立ち寄った人々や公園前を往来していた流浪の人々は、時には劇的に、また時にはジワジワと何とも寂しく変容していきました。でもどんなに変容していても心の何処かに自分のできることで何とか生きていきたいという強い思いを抱いているのではと感じさせる人々も何人もいたような気がします。

ひとつボタンをかけ違えてしまえば、誰にだって起こり得る現実なのだとしみじみ思います。故郷を去った人も、去った人を探し待ち続ける人も、心の隅にずっと埋めることのできない寂寞とした世界を持って一生を過ごしていくことになるのでしょう。

引越しから数年が経ち、通りの様子もだいぶ変化したと風

の便りに聞こえてきます。でも住んでいる人々の町への愛着は変わることなく、六月の初めには小さな公園は、祭りの活気に溢れていることでしょう。町の人々の生き生きした表情や大活躍する商店主の人々や女性軍の働きぶりが目に浮かびます。

祭りの賑わいの去った公園には、今はどんな人達が立ち寄っていくのでしょうか。